

ある登山者が道に迷い、1日中、山の中をさまよっていました。そんな時、前方より登山者の身なりをした人が現れました。助かったと思いきや、近寄り、迷ってしまったことを告げると、その方はすでに3日もさまよっていたとのことでした。このように、道に迷っている人が迷っている人を助けることはできません。ですから私たちクリスチャンも道を見失ったような生き方をしている人は、周りの人々を救いに導くことはできません。飛行機や宇宙船も目標に向かってまっすぐに飛んでいると思われがちですが、飛行機は風向きなどで目標の高度、方向から少しずつずれていくこともあります。上へ行きすぎたら下へ向かうようにし、下へ行きすぎたら、上へあげていくように、調整しながら飛んでいます。外れたら、戻るだけなのです。日曜日に礼拝来るのはこれと同様に私たちの生き方でずれてしまったところを見つめて、直していきようなものです。クリスマスとは人が大きく外れてしまった道に気づかせるためにイエスキリストが来られる時なのです。ですから私たちが迷った人に手を差し伸べていけるように、礼拝と御言葉から本来の道に戻っていきたくと思います。

■ オオカバマダラと「とうわた」

世界には240種類の蝶がいるといわれています。このオオカバマダラは大陸間を移動し、約5000km渡る蝶として有名です。そしてこの蝶の特徴としては毒を体内に宿していることです。5000kmも移動する時に外敵である鳥類に食べられないようにするためなのです。それはどのようにするのかという、「とうわた」という食物にあります。このとうわたは葉を食べられるときに、葉の輪郭部という外側から毒を出します。ですからオオカバマダラは食べる時、葉の外側からではなく、内側をくりぬいてから食べるようになります。そうすると毒を出すことはありません。しかしオオカバマダラは、大量の毒ではなく、葉の全体に微量に含んでいる毒を摂取し、蓄えていくことによって自らに毒を含み、天敵である鳥から身を守るようにしているのです。また「とうわた」もオオカバマダラの背についた花粉でしか、受粉できないようになっています。不思議なことにオオカバマダラは一年で命が尽きる生き物なので、どのオオカバマダラは教えあっているのではなく、誰に教わることなく全てのオオカバマダラは自然のうちにそのような生き方をします。このことを通しても、神様の創られた被造物は素晴らしく調和を保っていることがわかります。

■ 読解力について

最近のアンケートによって日本人の読解力が下がってきていることが分かっています。2003年ごろも読解力が下がり、様々な取り組みによって近頃は読解力が回復していきました。2003年ごろはインターネットの普及でした。しかしここ数年のものすごい勢いで低下しています。その原因はスマホです。一度下がった読解力を回復させてきた今までの取り組みをさらに強化しているようですが、その低下は止まりません。今は、物事を理解する力が下がってきています。このような状況は、ローマ書が書かれた当時の現状と似ています。ローマ書が書かれたのはAD57年、イエスキリストの昇天後約20年、ヘブライ文化からヘレニズム文化圏へと福音が到達しつつあり、聖書の教えている価値観と、ローマ市民が生まれ育った価値観の相違点に隔たりがあり、聖書を読み、理解することが難しい現状がありました。しかしその時代の様々な価値観で聖書を理解していくことは難しいことです。そのためには良心によって聖書を理解していかなければなりません。

■ 良心とは

この世界には2種類の宗教があります。それは「人間が作った神」と「人間を創った神」です。良心とは本来、「人間を創った神」が私たちを創造された時から備えて下さっているものです。神様との関係を感じる部分であり私たちはその良心に基づいて決断し行動することができるはずですが、これは日本のいわゆる道徳的な考え方である良心とは違います。日本の道徳的な価値観、生まれ育った国、地域による価値観によって私たちの判断基準は違ってくる。しかし、私たちは間違った価値観のまま生きていくと本来の良心が鈍っていくのです。いつの時代も良心が鈍り私たちの歩みは的を外していく

歴史を繰り返しています。その中で杉原千畝やシンドラーのように世の中の価値観ではなく、神に与えられた良心によって生き抜いた人々がいることを忘れてはいけません。私たちは神様にある目的、ビジョン、夢を果たすために良心で感じて行動していくことが大事です。

■ ローマ書14章より 弱いもの・侮辱・裁きについて

① 弱いもの

「あなたがたは信仰の弱い人を受け入れなさい(14:1)」とあります。この信仰の「弱い人、弱いもの」とはどのような人のことでしょうか。弱いとは自分の価値観を捨てることのできない人のことです。教会の中においても、周りを批判したり、批評したりしてはいけません。そして私たちは教会の中だけではなく、遣わされているところにおいても同じように自分に合わない人を批判、批評してはいけません。それは信仰者としてふさわしい歩みではありません。

② 侮る

「食べる人は食べない人を侮ってはいけなし、食べない人も食べる人をさばいてはいけません。神がその人を受け入れてくださったからです。(14:3)」この侮るということは原語のギリシャ語では「エクスセネオウ」という言葉が使われています。これはヘロデ王がイエスを侮辱した時に使われている言葉と同じ言葉です。ですから私たちは周りの人を侮辱している時、ヘロデがイエスを侮辱したことを同じことであると理解しましょう。ヘロデがイエスを侮辱することについて理解できるのであれば、私たちがしていることと重ねてみて、それを止めるようにしましょう。

③ 裁く

「あなたはいったいだれなので、他人のしもべをさばくのですか。しもべが立つのも倒れるのも、その主人の心次第です。このしもべは立つのです。なぜなら、主には、彼を立たせることができるからです(14:4)」しもべは、「デューロス」ではなく、「オイケテイス」が使われていて、これは自らですすんで「しもべ」となった者を表す言葉です。クリスチャンである私たちも「私たちの中でだれひとりとして、自分のために生きている者はなく、また自分のために死ぬ者もありません。もし生きるなら、主のために生き、もし死ぬなら、主のために死ぬのです。ですから、生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のもので(14:7-8)」にあるように自ら喜んで意思を持ってキリストのしもべとなる必要があります。その視点で教会内において「弱いものへの侮辱や裁き」がなくなるようにしていきたいのです。また私たちが遣わされている家庭、職場など近い場所などでもキリスト者としての歩みをしていきましょう。

■ 本当の自由とは

自由の本来の意味は「自分が存在する理由」です。神様によって創られたので、神様において目的が存在しています。あなたは何のために存在しているのでしょうか。それは正しい良心の元で感じるすることができます。私たちが礼拝するのは、神様の元に出て良心を還元するためでもあります。本当の自由を得た私たちは、迷っている人々を本当の自由へと導くことができます。導くためには出会い、信頼を得るまで関わるのが大切です。イエスは私たちの弱さを理解するために、この地上にくだってきました。それがクリスマスです。ですから私たちも自分の弱さを認め、そんな私を十字架にかかるほどの愛して下さったアガペーの愛に満たされましょう。これが本来の教会の姿です。裁きあうことは簡単です。また侮辱し、軽蔑し距離をおくことも簡単です。しかし周りの方々を理解しようとする姿を現し、本当の自由に生きていきましょう。『もし生きるなら、主のために生き、もし死ぬなら、主のために死ぬのです。ですから、生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のもので。』(ロマ 14:8)